

《論文》

夏目漱石『夢十夜』論——語りの変化から見る『夢十夜』

松下 彩 MATSUSHITA, Aya

【1】はじめに

『夢十夜』（『東京朝日新聞』一九〇八年七月二十五日〜八月五日）は第一夜から第十夜までの十篇で構成された作品である。『夢十夜』という名の通り、登場人物である「自分」の見た十の夢の内容が語られる作りになっている。そのため、この作品自体を作者である漱石の見た夢として捉え、漱石についての精神分析や心理分析を行おうとする研究が数多く存在する。作者漱石の心理を推し量るためには、夢という暗示的な内容を描いたこの作品は格好の題材であったのだ。

しかし、『夢十夜』はあくまで夢というものを仮構した小説である。本稿では、あえて作者である漱石の存在を括弧でくり本文読解を行う。

まず『夢十夜』研究の全体の流れについて確認する。¹⁾ 発表当時、『夢十夜』の文壇における注目度は、決して高くなかった。この作品を最初に評価したのは伊藤整であり、伊藤²⁾は「原罪的な不安」が『夢十夜』の

根底にあることを指摘した。また荒正人³⁾は精神分析を用いて第三夜を読み解き、漱石自身の過去と結びつけた論を展開した。ここから漱石の心理を探ることができる作品として『夢十夜』に注目が集まるようになったのである。また、始めはそれぞれの篇ごとに個別に読み解くものが多かったが、次第に全十篇を統一体として読み解こうとする論が増えてきた。その場合、夢に現れている何かしらのモチーフやテーマが、全十夜を貫いていることを指摘するものが多い。

伊藤や荒による指摘が影響を与えたことや、夢という虚構空間の極地ともいえるものが舞台だということもあり、作者である漱石のそれまでの経験や思想と結びつけて『夢十夜』を読み解く論はいまだに多い。しかし、近年では、作家論から次第に作品論的な読み解き（文体、表現方法に注目するものや、夢分析・精神分析を行うもの）へと移行してきた。この動きは、それぞれの篇ごとに個別に読み解く論にも、十篇を統一体として読み解く論にも見られる。

これまでの研究の中で、それぞれの篇ごとに個別に読み解く方法と、十篇を統一体として読み解く方法の二通りの読解が行われてきたことは先ほど述べた通りである。しかし、個別の読み解きと、統一体としての読み解きの両方ともいまだに安定した見解が示されていない。

十篇を統一体とみなす研究の不安定さについて、『夢十夜』は十篇がそれぞれで独立している話であるからだとする意見もある。たとえば笹淵友一⁴⁾は「内容が夢という暗示的なものであるために揣摩臆測にわたることが多い。勢い評者自身の思想に引きつけられる結果を生む」と指摘し、ある一つのモチーフが全篇を貫いているという意見に懐疑的である。この指摘の通り、夢の意味を探ることのみに頼り十夜を統一体として把握することは困難であることが分かる。

そこで、本稿では夢の内と外に注目し、『夢十夜』という作品を読解していきたい。松元季久代⁵⁾は「語り手はまず「こんな夢を見た」と、夢の外から夢の記憶を語ろうとするのだが、次に現れる「自分」という主格を顕示した語り手は、すでに夢の世界の住人である」と指摘している。

この指摘を手がかりにし、語り手である「自分」が夢の内と外にどのような現れているか、そしてそれは夢の中で起きる出来事とどう関わりを持っているのかということに注目し、十夜全体を統一体として読み解きたい。また、本稿では個別の読解と全体の読解を併せて行う。そうすることで、各篇をそれぞれ独立した作品として読むべきか、それとも十篇を統一体として読むべきかという疑問にも、おのずとこたえが導き出されるだろう。

【2】個別読解

まず、それぞれの篇を形式と内容の二つの面から個別に読解する。形式については主に語りの特徴に注目し、内容については夢内部の様子に注目して読み解く。

第一夜

女が、「もう死にます」と言った。「自分」はその言葉を疑うが、女は死後再会するために百年待つことを「自分」に約束させたあと、間もなく死んでしまう。「自分」は女の言葉に従い、墓の前で待ち続ける。女に騙されたのではと疑いはじめたとき、目の前に百合の茎が伸びてきてつぼみが開いた。そして遠い空に暁の星が瞬いているのを見た「自分」は、「百年はもう来てゐたんだな」と気がついた。

第一夜は「こんな夢を見た」という一文から始まる。これは既に目覚めている「自分」、つまり夢の中ではなく外側にいる「自分」の言葉だということが分かる。しかし、この言葉のあと夢の内容について詳しく語る部分では「自分」は今まさに夢を体験しているかのように語っていてもいい。

ここでの女は未来を見通すような言葉を何度も「自分」に告げており、「自分」はその言葉を疑いながらも言われたとおりに行動する。第一夜における女は「自分」を「自分」の望む方向へ導く役割を果たしている。

第二夜

お前に悟ることはできない、と和尚に言われた「自分」は、武士の意地にかけても悟りを開いてやろうと躍起になる。もし次の刻までに悟れたらこの短刀で和尚を殺し、悟れなければこの短刀で自刃しようと覚悟を決めた。必死になりすぎて意識が朦朧としてきた頃、時計の音が刻限

の来たことを告げ「自分」ははっとして短刀を手にした。

第一夜と同じく、「こんな夢を見た」という「目覚めている「自分」」の言葉のあとは、「夢を体験している「自分」」が夢の内容について語っている。

和尚は「自分」に対し、侍であれば悟れるはずだ、悟れないところを見るとお前は侍ではあるまい、と述べる。その言葉を受けた「自分」は怒り、「どうしても悟らねばならない。自分は侍である。」と考える。悟りを得るためには自意識を捨てる必要があるが、和尚の「御前は侍である」という言葉によって「自分は侍である」という意識を強くしてしまっている。つまり、和尚は「自分」に悟ることを促しながらも、その言葉によってかえって「自分」が悟れなくなる状況を作り出しているのだ。和尚は、悟るということを「自分」に課しながらも決して悟らせようとしないう点で、夢の中において主導権を握っている。

第三夜

「自分」は六歳になる子を背負っている。なぜか子供は盲目になっていて、謎めいたことばかり話す。不気味なこの小僧を捨てるために森へ入ると、小僧が「御前が俺を殺したのは今から丁度百年前だな」と言った。途端に、「自分」は百年前にその場所で盲人を殺害したことを思い出したのだった。

第一夜・第二夜と同じで、「こんな夢を見た」という一文のあとは、「夢を体験している「自分」」の視点に沿って夢の内容が語られる。

小僧は目が見えないにもかかわらず、今起きていること、そして次に起きることを正しく把握している。田圃へ差し掛かると「田圃へ掛つたね」と言い、「どうして解る」と「自分」が聞くと、「だつて鶯が鳴くぢ

やないか」という言葉のあとで鶯が鳴くのである。

また、「何がつて、知つてるぢやないか」と小僧が言うと、「自分」は「すると何だか知つてる様な気が」しだす。「文化五年辰年だらう」と言われると「成程文化五年辰年らしく」思つてしまう。最後には「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」と言われ、「自分は此の言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、此の杉の根で、一人の盲目を殺したと云ふ自覚が、忽然として頭の中に起つた。」となる。このように、小僧の言葉が「自分」の記憶を導いているのである。小僧は未来・過去を把握し、「自分」の行動や記憶を導く存在だといえる。

第四夜

「自分」は子供の姿になっていて、爺さんが酒を飲むのを見ている。爺さんのあとをついていくと、爺さんは子供たちに、「今に其の手拭が蛇になるから、見て居らう。見て居らう。」と言ひ笛を吹きはじめたが、何も起こらない。今度は、今になる、蛇になる、と歌いながら川の中をどんどん進んでいく。「自分」は爺さんが向こう岸に上がつて蛇を見せてくれるのを待ち続けたが、爺さんは川から上がつてこなかった。

第四夜には「こんな夢を見た」という一文がない。第一夜から第三夜まで続いていた「目覚めている「自分」」による冒頭の語りはなくなるのである。

「自分」は爺さんに対し興味を抱き、爺さんの奇妙な言動を観察しているが、最後まで爺さんと言葉を交わさない。「自分」は爺さんに興味を持ち、手拭が蛇に変わるといふ奇跡を待ち望んでいるが、直接接することはできないのである。

第五夜

「自分」は戦に負け、捕らえられている。死ぬ前に一目女に会いたいと願ったので、一晩だけ猶予が与えられた。その女は「自分」に会うために馬に乗り、夜の中を必死に駆けてゆく。しかし、途中で天探女が鶏の鳴き声をまねて鳴き、夜が明けたかのようにみせかけたため、驚いた女は淵に落ちて死んでしまった。

冒頭には「こんな夢を見た」という一文がある。第一夜から第三夜までと同じように「こんな夢を見た」と語っている。目覚めている「自分」は、夢の内容部分に入ると、「夢を体験している「自分」」の視点に沿って夢の内容を語り始める。さらに、後半からはこの視点をも離れ、「自分」には見えない場所にいるはずの女の様子について語っている。最後には「蹄の跡はいまだに岩の上に残つて居る」とことと「此の蹄の痕の岩に刻みつけられてゐる間、天探女は自分の敵である」ことを述べる。この後半部（女の様子について語る部分から最後まで）における全知視点の語り手は、明らかに「夢を体験している「自分」」でも「目覚めている「自分」」でもない。いまだ夢の中に留まったまま、夢の中での「自分」の経験を持ち続けている語り手だと言える。

つまり、この第五夜では冒頭には夢から覚めた語り手が、そして最後には夢から覚めていない、しかし「自分」としての意識を持ち続けている語り手が現れているのである。

第六夜

仏師運慶が仁王像を刻んでいる。「自分」は、ここは鎌倉時代かと思つたが見物人は明治の人間ばかりである。運慶の仕事ぶりに感心していると見物人の一人が、彫刻とは像を作るのではなく掘り出すもののだと言つ

た。なるほどと思い、自宅へ戻つて彫刻をやつてみたが、上手くいかない。明治の木には仁王は埋まつていないのだと分かつた。

「こんな夢を見た」という一文が冒頭から消える。語りからは「目覚めている「自分」」の姿は見られない。この夢が夢であるかどうかということは内容から判断するしかない。夢らしさは語りではなく、内容の不思議さ（生きていないはずの無い運慶が目の前で仁王像を刻んでいる、という不可解な状況）に現れている。

「自分」が運慶の仕事ぶりを見て感心していると、見物人の一人である若い男が「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんぢやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋つてゐるのを、鑿と槌の力で掘り出すのだ。」と答える。この言葉を受けて、「自分」は行動を起こす。つまり、この若い男の言葉が「自分」の行動を促し、最終的に第六夜における「自分」の疑問を解決させたと見える。若い男はこの夢の中において「自分」を悟りへと導く存在であつたのだ。

第七夜

「自分」は乗っている船がどこへ向かっているのか分らない。不安が募り、死のうと思いつめた「自分」はある晩ついに船から飛び降りてしまう。しかし、足が離れたとたん、すぐに後悔しはじめた。行き先の分らない船でも乗っているほうが良かったのだと後悔しながら、真っ暗な海へと落ちていく。

第七夜にも、「こんな夢を見た」という一文はない。

登場人物は、「自分」・船の男・水夫・乗合たちであり、他の篇に比べてかなり多い。「此の船は西に行くんですか」という「自分」の疑問に対し、船乗りの男は「怪訝な顔」をする。問いに対する答えは用意されず

「自分」の疑問は宙づりにされたままである。そして水夫たちは「自分」のような疑問を抱くことなく、帆綱を手繰り、船を進めようとしている。ここには、自分たちの行き先を気にする「自分」と、そんな疑問や不安を少しも抱くことがない船の男・水夫たちの様子が現れている。他の乗客たちとも意思の疎通を図ることができない「自分」の孤独感は強くなり、最後には船から飛び降りてしまうのだ。

第七夜では、「自分」は悟りを得ながらも、もはやそれを活かさないという状況に陥るのである。

第八夜

「自分」は床屋に入った。「自分」の目の前にある鏡には、背後の往來の様子が映っている。「自分」は次々移り変わるその光景に見入った。床屋の帳簿で女が札束を数えている姿が見えるのだが、いつまで経ってもその札束は尽きない。驚いて振り返ってみたが、女も札束も見えなかった。

ここでも、「こんな夢を見た」という言葉はなく、「自分」はこの夢を今まさに経験しているかのように語り始めている。

床屋の鏡越しに往來の様子を眺める「自分」は、見たいと思ったものを自分自身の眼で直接見ることができない。また、「自分」が振り返って確認してみると鏡に映っていたはずの女がいなかったように、鏡に映るものが実際に存在するものかどうかは分からない。鏡に映る自分や他人の姿形に気を取られていた「自分」は、鏡に見せられているものしか見られず、自分の眼で直接見て正しい評価を下すことはできなかったのである。

第九夜

世の中がなんとなくざわつき始めた。家には若い母と三つになる子供がおり、侍である父親は不在だ。母親は夫の無事を祈るために、夜になると神社へ行き、幼いわが子をあやしつのお百度を踏む。しかし、夫はとうの昔に浪士に殺されていたのである。こんな悲しい話を、夢の中で母から聞いた。

ここにも、「こんな夢を見た」という一文はない。これまでとは異なり、夢の中に出てくる登場人物のうち誰が「自分」かということがはつきり示されずに物語が進む。最後に「こんな悲しい話を、夢の中で母から聞いた。」と述べられ、今までの話が、夢の中で語り手がその母から聞いた内容であったことが明かされる。ここで「目覚めている「自分」の存在が確認できる。また、第九夜において夢の主体としての「自分」は登場しない。「子供は何とも云はなかった」、「けれども縛つた子にひいひい泣かれると、母は気が気でない」というように、「子供」「子」という表現をするだけで、「自分」という人物は現れない。これは語り手である「自分」と重なる人物がいらないということである。

このような形になった理由は、この夢が「夢の中で母から聞いた」夢であるからだろう。この夢において、語り手が「子供」であることはほぼ間違いないが、夢の中で中心となって行動するのは母である。その母の話を語り手が話しているため、中心となる人物「自分」は消え、父を待つ母と子供の物語を、全知視点から語る語り手だけが残されるのである。そして、最後の一文によって全知視点で語られていた物語が、ようやく「自分」の物語となる。

第九夜は、夢という枠組みの中で母が語った物語を、さらに夢から覚めた「自分」が語ってみせる、という入れ子構造になっているのである。⁶⁾

また、「今にも戦争が起りさうに見える」時代に、父の帰りを待ち続ける母と子の姿が描かれており、第六夜から第八夜までに漂っていた〃今生きている場所に対する不安や不信感〃というものが第九夜からも見受けられる。

第十夜

「庄太郎が女に攫はれてから七日目の晩にふらりと帰つて来て、急に熱が出てどつと、床に就いてみると云つて健さんが知らせに来た。」という語りから始まる。また、第四夜・第六夜・第七夜・第八夜と同じく、「こんな夢を見た」という一文がない。第十夜の場合は「庄太郎」の身に起きた出来事を「健さん」が語り、さらにその話を「庄太郎」の視点に沿つて「自分」が語り直す、ということが行われている。母が「自分」へ語るだけだった第九夜より、さらに一段階増え、「庄太郎」から「健さん」、さらに「自分」へと三段階の伝聞になっているのである。

女に連れられていった先で、「庄太郎」は豚の大群に襲われる。「庄太郎」のもとへと押し寄せた豚は、見目の良さを気にして汗水流して働くことをよしとしない「庄太郎」を非難するものである。水菓子や女を眺めることが好きで、いつもパナ帽を被っている「庄太郎」は、醜い豚に嫌悪感を抱く。しかし最終的には、その豚に舐められて倒れてしまうのだ。女は「庄太郎」に、物事の本質を知らなければ見た目の立派さなど無意味であることを示したのである。

また、庄太郎についての話を「健さん」から聞いても、「自分」は少しも不思議に感じていない。そして、「庄太郎」の身に起きたことを語ったあとに述べられた「だから余り女を見るのは善くないよ」という「健さん」の言葉に対し「尤も」だと感じ、「庄太郎は助かるまい。パナマは健

さんのものだらう。」と淡々と予想する。ここでの「自分」は、客観的に「庄太郎」の物語を見つめ、それを語るだけの存在なのである。

まとめ

十篇を確認した結果、次のことが分かった。

まず形式については、一つの篇の中で〃目覚めている「自分」〃が語るときと〃夢を体験している「自分」〃が語るときがあるということが分かった。

第一文で〃目覚めている「自分」〃の語りがあり、そのあと〃夢を体験している「自分」〃が夢の内容について語りはじめる、という形式は第一夜・第二夜・第三夜・第五夜において見受けられる。類似する篇として第九夜が挙げられるが、第九夜の場合、冒頭に「こんな夢を見た」という一文はなく、母と子のようなすが全知視点から語られ続ける。そして、結末において「こんな悲しい話を、夢の中で母から聞いた」と述べられるのである。第九夜の場合、冒頭ではなく、結末において〃目覚めている「自分」〃の存在が示されるのだ。

また、第五夜は「こんな夢を見た」という一文で〃目覚めている「自分」〃の存在が示されるが、この篇も第一夜・第二夜・第三夜とは大きく異なる点がある。第五夜では夢の内容について語られる途中で〃夢を体験している「自分」〃の視点からは見えないはずの女の様子が語られているのだ。松元季久代⁸⁾は、「自分」の位置から見えるはずのないもの（駆けつける女）が語られるというこの状況について「視点の分裂が起きている」と指摘している。第五夜の途中からは、それまでの篇では存在しなかった〃全知視点で夢を捉える「自分」〃が語り始めているのだ。

第四夜・第六夜・第七夜・第八夜・第十夜には「こんな夢を見た」な

どの一文がなく、自然に夢が始まっている。「こんな夢を見た」や「こんな話を聞いた」などのように、「目覚めている「自分」」の存在が見受けられないため、夢は夢なのかどうかも怪しく、そして「自分」が夢から目覚められたのかどうかも分からない。

また、内容については次のことが確認できた。多くの場合「自分」は夢の中で叶えたい願いがあり、疑問に対する答えを得たいと考えている。そのきっかけとなるのが夢の中の登場人物たちである。また、夢の中の登場人物たちは、ある時は「自分」を願いの成就から遠ざけ、ある時は「自分」を翻弄するようなことを言い、またある時は「自分」が取るべき行動を教える。その結果として「自分」は自分の願いを思わぬ形で叶えることとなったり、逆に決して叶わぬものにしてしまったりする。つまり、『夢十夜』では、夢の中の登場人物の発言や行動によって、「自分」の行動、ひいては夢の結末が決定されるのである。夢の中の登場人物たちは、「自分」に大きな変化を与えるのである。

ただし、これは第九夜・第十夜には当てはまらない。第九夜・第十夜では、もはや「自分」は内容的主役ではないからである。第九夜では「母」が、第十夜では「庄太郎」が、それぞれ内容的な主役を担っている。そこでこの「自分」は夢の内で起きる事柄を見つめるだけである。

【3】統一体としての読解①

ここからは、全十夜を統一体として読み解いていく。

室井尚⁽⁹⁾は「こんな夢を見た」という文について、「とりわけ全体の構造にとつて極めて重要な機能を果たしている」と述べる。その理由は、「実際に第五夜以降消失するこの文が、あたかもすべての夜に冠せられて

いるかのような印象を読者に与えている」からである。また、「こんな夢を見た」という一文について「各夜が等質でかつ非連続だという錯覚を作り出している。ここでは各夜の夢は串にさした団子のようにそれぞれの閉域を作ると同時に、同一主体の夢の提示という性格を付与される」と指摘している。

この指摘の通り、「こんな夢を見た」で始まる夢は過去の夢として完結しているのだ。まずは「こんな夢を見た」という言葉に注目し、形式の面から全十夜の連続性について見ていく。

第一夜・第二夜・第三夜は、「こんな夢を見た」という一文で「目覚めている「自分」」の存在が示される。そのあとは、「夢を体験している「自分」」の視点から夢の内容が語られる。このとき「夢を体験している「自分」」の視点を離れた語りが行われることはない。

第一夜から第三夜まで続いた、この安定した流れを断ち切るのは第四夜である。⁽¹⁰⁾ 第四夜では「こんな夢を見た」という一文が消え、「夢を体験している「自分」」による語りで突然夢が始まる。ここでも「夢を体験している「自分」」の視点を離れて物事が語られることはない。

第四夜とは反対に、「こんな夢を見た」という「目覚めている「自分」」の語りがあり、「夢を体験している「自分」」の語りもあり、さらには「全知視点で夢を捉える「自分」」の語り（「夢を体験している「自分」」の視点を離れた語り）もあるのが第五夜である。全十夜のうちこれら全ての語りが揃うのは第五夜だけである。ここで現れた「全知視点で夢を捉える「自分」」は、「目覚めている「自分」」と「夢を体験している「自分」」とが融合した語り手であり、これまでとは異なる「新しい語り手」だと言い換えることができる。第五夜では「目覚めている

「自分」と「夢を体験している「自分」」との区別がなくなり、全てを知る立場から夢の内容が語られ始めていくのである。

その後の第六夜から第八夜までは「夢を体験している「自分」」による語りだけで進行する。この流れが変化するのは第九夜である。

第九夜では「目覚めている「自分」」の存在が確認できるが、それはこれまで見られた「こんな夢を見た」という言葉ではなく、「こんな悲しい話を、夢の中で母から聞いた」という言葉で示される。しかも、これは冒頭で述べられるのではなく、第九夜の結末で述べられる。第六夜から第八夜までは「目覚めている「自分」」の存在がはっきりとは確認できなかつたため、これらは始まりも終わりも曖昧な「閉じられることのない夢」であったが、この第九夜の最後の一文によってこれらの夢は夢として閉じられたのである。

第十夜では「目覚めている「自分」」の語りはなく、「夢を体験している「自分」」の語りと、その「自分」の視点を離れた「全知視点で夢を捉える「自分」」の語りが見られる。第九夜と同じく、人から聞いた話を語り手が語る、「健さん」という人物が「自分」に話し、さらに「自分」がその話を語っているという点である。伝聞の段階が一つ多くなっているのである。語り手である「夢を体験している「自分」」は、夢の内容から遠ざかり、ほとんど語ることをだけを行う存在に変化したと言える。

「全知視点で夢を捉える「自分」」の語り、つまり「新しい語り手」が登場するのは第五夜・第九夜・第十夜である。主人公に分かるはずのない、他人の感情や行動を客観的に語ることができるといのがこの「

新しい語り手」の特徴であるが、同時にこの語り手は「自分」の感情も語りの中で明らかにしている。たとえば、第五夜では「天探女は自分の敵である」ということを、そして第九夜では「八の字が、鳩が二羽向ひあつた様な書体に出てゐるのが面白い」と述べている。第十夜では「パナマは健さんのものだらう」とも意見を述べており、「夢を体験している「自分」」としての感情を持ち合わせていることが分かる。この「新しい語り手」は夢内部を自由に把握し、そして「夢を体験している「自分」」としての感情も持つのだ。

このように、個別読解の成果に即して全篇を読み直すと、十夜全体に連続性が見えてくるのである。

【4】統一体としての読解②

形式の特徴について確認してきたが、ある疑問が残った。

第六夜から第八夜までの「閉じられることのない夢」をまとめて閉じる役割を果たすのが第九夜だとして、そのあとにある夢、つまり第十夜はどのような夢だと言えるのだろうか。

この点について、先ほど見た形式の特徴に加え、内容の面からも考えたい。

内容的特徴として挙げられるのは、夢の中に出てくる「自分」は何かしら分らない状態にあり、その導き手として現れるのが他の登場人物だということである。第一夜、第二夜、第三夜では「自分」が夢の登場人物から受ける影響が大きく、またそれによる「自分」の変化も大きい。またこの三篇は「こんな夢を見た」という言葉で始まる夢である。特に百年間待ち続けるという行為（第一夜）や、百年前の罪の記憶を実感と

して得る（第三夜）など、通常の時間感覚を超越した展開が特徴的である。また、第二夜では和尚が「自分」に対して侍ならば悟れるはずだと執拗に迫ったため、「自分」は余計に悟りから遠ざかってしまった。登場人物から受けた強い影響が、その夢の結果につながっているのだ。

第四夜は「こんな夢を見た」という言葉がなく、突然夢の状況描写から始まる。そして子供である「自分」は爺さんと言葉も交わせないなか、ひたすらあとをついて行くが、最後まで爺さんが「自分」に変化をもたらすことはない。「自分」は爺さんが手拭いを蛇に変えるという奇跡を見たいと願うが、その願いは叶えられないのである。これまでの三つの夜において、「自分」は他者から強い影響を受けて変化を向かえるなか、この第四夜では他者と関わらず、全く変化しない「自分」の姿が描かれているのである。一、二、三夜とは異なる夢の形を示した夜だと言えよう。この、傍観者としてしか関わることができないという「自分」の様子は後の第九夜、第十夜にもつながる。

変化しない「自分」が描かれたあとには、対照的に大きな変化を描く夜が続く。第五夜では、女との再会が叶わず命を落としたはずの「自分」が、生死を超え、語り手という立場から天探女への恨みを告げている。その恨みは「目覚めている「自分」」と「夢を体験している「自分」」という別々の意識を一つにし、「全知視点で夢を捉える「自分」」という「新しい語り手」を生み出した。

続く第六夜から第八夜までは「目覚めている「自分」」を意識させる言葉が消える。第五夜で「目覚めている「自分」」と「夢を体験している「自分」」の意識が一致したことにより、この第六夜から第八夜までの夢も、「目覚めている「自分」」と「夢を体験している「自分」」と

をはっきり分けるような言葉が消えたということである。内容も前半部（第一夜から第五夜）までに比べると時間の飛躍や他者による暗示的な発言が減る。それぞれの夢で時代・場所・評価というテーマがあり、「自分」は夢の中で他者と対話することによって何かしら悟りを得たり、またそれまでの考えを改めたりといった変化をしていく。

第九夜では再びこの流れが断ち切られる。全知視点からの語りで、夫の帰りを待つ母と子供の姿が語られるが、最後になってこの語り手こそ「目覚めている「自分」」であり、夢の中における子供であったのだということが分かる。また、第六夜から第八夜までに漂っていた、生きている場所に対する不安や不信感というものが第九夜でも見受けられる。これまでと異なるのは、語っている「自分」は「夢の中で母から聞いた」話を、再度語り手の立場から語り直しているということである。ここで「自分」は夢を体験している子供であり、同時に夢の中で母から昔話を聞いている「自分」であり、さらには「目覚めている「自分」」として夢を語っているのだ。第五夜と同じく、「自分」はここでも大きな変化を遂げている。第九夜では「自分」は他者から影響を受けず、母を見つめる子供の視線としてのみ存在する。これは第四夜の「自分」と同じで、他者と関わらず影響を受けることも変化することもない、という状態である。ただし、第九夜の場合は語りの変化という形で「自分」の変化が示されたのだ。「夢を体験している「自分」」と「目覚めている「自分」」の意識が一致した語りでありながら、夢の最後には「目覚めている「自分」」の存在が確かに示される。他者との関係の中で変化し続けた「自分」は、第九夜で遂に目覚めるのである。

「目覚めている「自分」」と「夢を体験している「自分」」の意識が

一致したことで形作られていった、これまで（第六夜から第八夜）の夢は、第九夜にて終結した。第十夜では語るだけとなった「自分」の姿が見られる。ここでの「自分」は夢の中で主体として動くこともなく、他者から影響を受けることもない。この姿は、変化し尽くした「自分」なのではないだろうか。第十夜では「庄太郎は助かるまい。パナマは健さんのものだらう」という、未来を見通すような言葉を「自分」が述べる。もはや「自分」は主体的に動くことは無いが、夢の中で起こることを把握し、次にどうなるかが分かるようになっていのである。夢の中で他者から多くの影響を受け、変化を遂げてきた「自分」は、第十夜に至り、他者から影響を受けることのない、完全な語り手となったのである。統一体として読み解いた結果、『夢十夜』は、「自分」の見た連続する十の夢であるということが分かった。

第一夜・第二夜・第三夜のように「目覚めている「自分」」と「夢を体験している「自分」」によって夢の内と外がはっきり分けて語られる夢は四夜で終わりを迎え、五夜での「自分」の変化以降、夢の中の「自分」と現実の「自分」の境は曖昧となった。それが示されるのが第六夜・第七夜・第八夜であり、この流れを終了させるのが第九夜である。そのあと第十夜では、完全に夢の世界に入り込んだ、語りに徹する「自分」の姿が現れている。

このように『夢十夜』の十篇を統一体として捉えると、第一夜から第十夜までの夢が「自分」の変化を示していることが分かった。

【5】おわりに

本稿では、これまでの『夢十夜』研究で指摘されてきた「自分」の視

線⁽¹³⁾に注目し、夢の内容の変化と合わせて分析することで、『夢十夜』を統一体として論じた。

最後に、『夢十夜』の十篇を通して描かれた「自分」の変化は何を示すのかということを考えたい。「自分」は他者との関わりを求め、その中で影響を受け続けてきた。夢の舞台は次第に現実味を帯びていき、「自分」はより多くの登場人物と関わっていく。たとえば、第七夜で船に乗っている人々に共感できないことを辛く感じ、第八夜で「自分」が他者の評価を気にする様子が描かれていた。第三夜では強烈な自意識が悟りの邪魔をし、第四夜ではつながりたくても他者とながれない姿が描かれた。第十夜ではついに「自分」対「他者」ではなく、「他者」対「他者」の物語が描かれる。そこでの「自分」は他者を見つめる一人の語り手ではない。最終的には他者から関与されることなく「自分」という行動主体をも影を潜めていくのである。

このように『夢十夜』は十篇の夢を通して、「自分」という意識がなくなっていく様子、つまり一人の人間が「自意識から解放される様子」が描かれているのだ。

注

- (1) 『夢十夜』研究動向をまとめたものとして、松元季久代「『夢十夜』研究の現在」『国文学』一九九四年一月、生方智子「夢十夜論」ベスト30『漱石研究8』翰林書房、一九九七年）参照。

- (2) 伊藤整「夏目漱石」『明治文学全集五五 夏目漱石集』筑摩書房、一九七

一年)

- (3) 荒正人「漱石の暗い部分」(『近代文学』一九五三年十二月)
- (4) 笹渕友一「夢十夜」(『濛虚集・夢十夜 漱石作品論集成四卷』桜楓社、一九九一年)
- (5) 松元季久代『夢十夜』における「自分」の転位——漱石のキュービズム『国文学』一九九四年一月)
- (6) 松元季久代は前掲論文・注(5)で、第九夜は「夢の中で」「母から聞いた」という「夢中夢」の形式であると指摘した。また、宮澤恒太は『夢十夜』の編集方法——小品即章構成のテクスト——(『金沢大学国語国文』二〇〇一年三月)で、第九夜では、語り手が母から聞いた物語を語りなおすという二重構造が起きていることを指摘した。
- (7) 宮沢恒太は前掲論文・注(6)で、第十夜の語り手は、「庄太郎」と「健さん」という二人の他者を挟んだ三重構造の中で生起している、と指摘している。
- (8) 注(5)に同じ
- (9) また、藤森清は「夢の言説——『夢十夜』の語り」(『語りの近代』有精堂、一九九六年)において、第五夜には登場人物としての「自分」と、語り手としての「自分」という二つの語り手がいると述べ、「視点の分裂」が起きていることを指摘している。
- (10) 室井尚「漱石『夢十夜』論——テキスト分析の試み——」(『文学理論のポリティック』勁草書房、一九八五年)
- (11) 室井は前掲書・注(8)で、第一夜から第三夜までで示される安定した構造(語り手は夢の外側において、夢の内容を語る段になると視点は夢内部の「自分」の目を離れない、という形)が第四夜で崩れ、第五夜・第九夜・第十夜

には「明白な壊乱」が起きていると指摘している。

- (12) 松元は前掲論文・注(5)で、第五夜の「自分」の位置から見えるはずのないもの(駆けつける女)を、第三者の眼が上空から語るという視点の分裂について、行為か傍観かという主人公に課せられた主題の強い構成力が、語りにおける一人称的視点と非人称的視点との混在を招いたのではないかと述べている。
- (13) 「自分」の視線とは、①夢から覚めている「自分」の視線、②夢を体験している「自分」の視線、③第五夜の途中から現れた全知視点で夢を捉える「自分」の視線、の三つである。「自分」という主体に注目し、この三種類の語りがあるということを目指したのが室井前掲書・注(8)と松元前掲論文・注(5)である。室井は語りの形態に注目し、十夜を通して「自分」が非人称的な視線を獲得していく様子を指摘した。また、松元は語りの形態そのものではなく、「自分」の具体的状況と体験に重点を置き十夜全体の方向性を示した。また、藤森清は前掲書・注(9)で、語りの機能に注目し、「自分」の視点(視線)の分裂が、『夢十夜』に「夢らしさ」を与えていることを指摘した。

※本文引用は、『漱石全集 第十二巻』(岩波書店、一九九四年)による。